様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５年　６月２８日現在

機関番号：２４２０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３４０１

研究課題名（和文）外来系装飾付大刀の系譜的検討を通じた古代東アジアにおける地域間関係の研究

研究課題名（英文）Research on interregional Relations in ancient East Asia through the genealogical analogy of ornamental swords of foreign derivation.

研究代表者
稲田　宇大（金宇大）（Kim, Woodae）

滋賀県立大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：２０７４８０５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、古墳時代に流通した各種刀剣類のうち、中国大陸や朝鮮半島に源流をもつとみられる、いわゆる「外来系大刀」を対象に、朝鮮半島出土例との比較分析を通じた詳細な系譜検討に取り組んだ。具体的には、柄頭に龍の文様をあしらった単龍・単鳳環頭大刀を中心に、三葉環頭大刀、三累環頭大刀など、主に古墳時代後期に製作された「外来系大刀」に対し、個々の資料の実見観察調査を悉皆的に実施することで、詳細な技術系譜を明らかにしていった。その上で、これらの大刀を所有・副葬した古墳被葬者らが当時の社会においてどのような立場にあったのかを推論した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で対象とした「外来系大刀」のような、朝鮮半島に系譜をもつとされる資料は、従来、いわゆる「外来」の資料としてそれ自体の系譜を深く追究しないまま、対外的な交渉に関わった人物であることを示すもの、あるいは渡来人ないし渡来系の人々がいた証左とされ、日本国内で完結した評価に留まっていた。本研究では、具体的に朝鮮半島のどの地域と技術的関係性を指摘できるのか、さらには、先入観的に「舶載品」とされてきた資料群は本当に列島内で製作された可能性はないのか、といった点を朝鮮半島での出土例を踏まえて改めて洗い直したことで、より客観性の高い交流史像を描出した点に大きな意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this project, I studied various ornamental swords in depth which had been distributed in Kofun-period, especially ones of foreign derivation which have origins in mainland China or Korean Peninsula. I analized the techniques in depth employed in production of swords which was made in the late Kofun period, concretely swords with single dragon ring pommel and single phoenix ring pommel, trefoil-shaped ring pommel, and trileaf-shaped ring pommel, through observational investigations of excavated articles. Based on the results, I infer what kind of position in society of the time people who possessed those swords had.

研究分野：考古学

キーワード：考古学　古墳時代　対外交流　製作技術

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
　研究代表者は、これまで古墳時代における汎東アジア的交流、特に日本列島と朝鮮半島の両地域の古墳で出土する副葬品の分析を軸とした古代日朝交流史像の再構築を目的に研究に取り組んできた。
　古墳時代後半の日本列島では、外装に貴金属による装飾部を付加した刀、いわゆる「装飾付大刀」が広く流通した。これらのうち、柄頭に環状の意匠を有する「環頭大刀」は、中国大陸にその源流をもつ「外来系」装飾付大刀の代表とされる。古墳時代後期後葉になると、単龍・単鳳環頭大刀をはじめとする多様かつ多量の装飾付環頭大刀が全国の古墳に副葬されたが、これらの製作・流通には大陸系、特に朝鮮半島系の技術工人が関わっているとされてきた（町田 1976）。当該時期の朝鮮半島は、高句麗・百済・新羅の三国と加耶諸国などが分立する「三国時代」にあたり、各地域が独自の意匠や技術を取り入れた特徴的な大刀様式をそれぞれ確立させていた。日本列島出土の多様な「外来系」装飾付大刀は、朝鮮半島各地の技術系譜が混在した極めて複雑な様相を反映したものである。

２．研究の目的
　本研究は、こうした様々な系譜の大刀が入り混じった古墳時代の外来系装飾付大刀を対象に、改めて基礎的な検討を試みることで、個々の刀種の製作地や技術工人の系譜を紐解くことを目的とする。古墳時代における倭王権ないし地域勢力の対外交流研究は、もっぱら外来系遺物の分析により進められているが、そもそもの「外来系遺物」の正確な系譜認識が定まっていなければ、復元される対外交流史像は実態にそぐわないものとなってしまう。したがって、本研究で取り組む分析は、古代日朝関係史を再構築する上での最も重要な基盤を固める作業といえる。

３．研究の方法
　上述の研究目的の実現のため、日韓の出土資料の実見観察調査を可能な限り悉皆的に実施する。この調査では、実物資料を実際に隈なく観察し、自身で実測図の作成や写真撮影をおこなう中で、製作技法などに関する微細な痕跡を確認する。そうして蓄積したデータに基づいて、「外来系」装飾付大刀を刀種ごとに比較検討し、型式学的な視点から分類・整理することで系譜的な評価を定めていく。

４．研究成果
（１）大加耶系龍鳳文環頭大刀の成立
　朝鮮半島の大加耶では、５世紀後葉以降、新羅や百済の装飾付大刀とは異なる様式の龍鳳文環頭大刀の生産体制が確立する。その技術的起源について、これまでの研究で、高句麗による漢城侵攻で百済が熊津遷都を余儀なくされた際、一時的な弱体化にともなって技術工人が大加耶へと流出した可能性を指摘していた（金 2013）。
　本研究では、龍鳳文環頭大刀の出現についての考察をさらに深めるため、柄頭元と鞘口に付随する筒金具に施された双龍文様に着目した分析を試みた。大部分の大加耶系龍鳳文環頭大刀における上記筒金具の双龍文は、２頭の龍が筒金具の中心付近で首を絡ませ、それぞれ頭の向きを反対に折り返して斜め上方に口を開く、いわゆる「絡首双龍文」（穴沢・馬目 1976）の構成をとるが、東亜大学校石堂博物館所蔵龍鳳文環頭大刀（図１）は、２頭の龍が首を絡めず、それぞれ斜めに交差する構成となっている。この「交差双龍文」の類例を探ると、高厳鳳徳里１号墳出土円頭大刀をはじめ、漢城期百済での製作をうかがえる事例にこれを認めることができた。これら交差走龍文の諸例は、龍文自体の文様要素の形骸化が進んでおらず、いずれも古式の特徴を留めていることから、大加耶系龍鳳文環頭大刀を特徴づける龍文の原型が百済に既に存在していた可能性を指摘した。

（２）日本列島出土母子大刀の系譜
　日本列島では、数は少ないが、大刀の鞘の佩表側に大刀本体と同様の装飾意匠をもつ小刀を付属させる「母子大刀」と呼ばれる様式の装飾付大刀が存在する。この大刀は、元来５世紀代の新羅で流通した三葉・三累環頭大刀において採用されるデザインとして知られ、新羅に系譜を追うことができるものとみられていた（穴沢・馬目 1987 など）。
　他方、近年になって、新羅圏域から遠く離れた朝鮮半島の西南部、

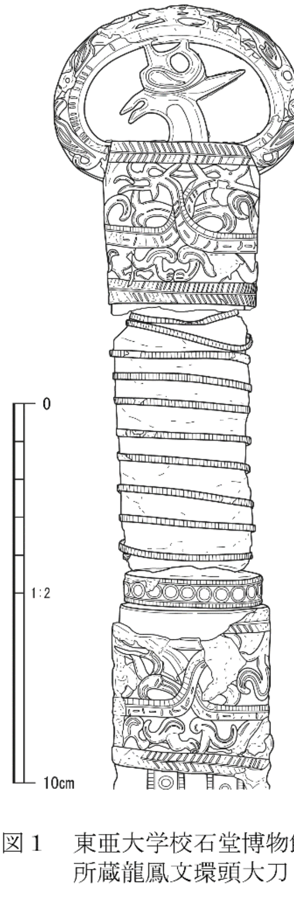

図１　東亜大学校石堂博物館
所蔵龍鳳文環頭大刀

栄山江流域に属する羅州丁村古墳では、大加耶系の銀装素環頭大刀に子刀が付随する例が確認された。そこで本研究では、大刀製作における「母子大刀」というデザインの採用が意味するところを明確化するため、日本列島で出土している「母子大刀」の事例を個別詳細に検討した。結果、新羅からの直接的な舶載品と評価し得る事例（愛媛県東宮山古墳出土三葉環頭大刀）が存在する一方で、大加耶系の技術工人が新羅系大刀を模倣製作した事例（宮崎県持田 26 号墳出土三葉環頭大刀）や、日本列島での伝統的な刀剣外装の意匠に「母子大刀」を取り入れた事例（奈良県藤ノ木古墳出土倭装大刀など）もあり、その在り方が一様でないことを確認した。大加耶圏域における「母子大刀」という意匠要素への認識は新羅を強く意識するものであったが、それが倭での大刀製作に取り入れられる段階で新羅的な表徴としての性格を失っていくことを明らかにした。

（３）三葉環頭大刀の系譜整理

三葉環頭大刀（図２左）は、環頭大刀の各種モチーフの中でもとりわけ古く、漢代中国に遡るとされる（町田 1976）。日本でも古墳時代の前期から後期まで、通時的に認められるが、その事例数は確認される時期幅の広さに比して多くはなく、また「三葉」というモチーフこそ共通するものの、材質やモチーフの表現、付随する外装の在り方が多様であるため、総合的な検討はあまりなされてこなかった。本研究では、貴金属による装飾をもたない「鉄製三葉環頭大刀」も含めて、日本列島出土例を集成し、改めてこれらを分類、系譜的な検討を試みた。結果、三葉環頭大刀の舶載を巡る通時的な変遷を次のように整理した。古墳時代前期以来、中国漢代の系譜を継ぐ鉄製の三葉環頭大刀が中国大陸から日本列島へともたらされていたが、古墳時代中期中葉頃を境に、その舶載元が朝鮮半島へと移る。中期には百済ないし大加耶から散発的に日本列島へと鉄製三葉環頭大刀が流入していたが、後期に入ると、大加耶からの装飾三葉環頭大刀の舶載が認められるようになる。これにより、日本列島出土三葉環頭大刀を具体的な系譜が明らかな外来系遺物として評価できるようになった。

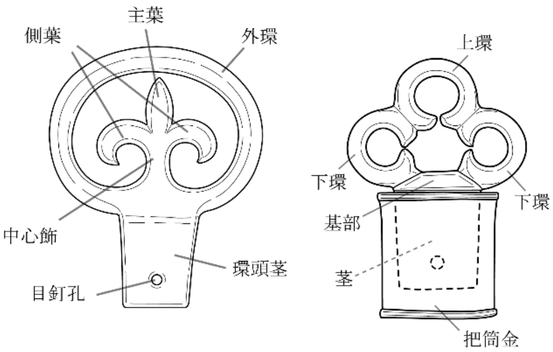

図２　三葉・三累環頭大刀柄頭の各部名称

（４）三累環頭大刀の生産と流通

三累環頭大刀（図２右）は、５世紀代の新羅圏域で盛んに流通し、新羅的な大刀意匠として広く認識されている（穴沢・馬目 1987）。日本列島では、６世紀後半にまとまった数の三累環頭大刀の出土が認められるようになるが、従来これらは新羅との関係性を示唆するものとして認識されてきた。

本研究では、日本列島出土の三累環頭大刀を対象に悉皆調査を実施、可能な限りの実見観察と再図化を通じてそれらの分類・整理を試みた。結果、柄頭形状からいわゆる「三累環頭大刀」にカテゴライズされる資料群は、各種特徴のまとまりから時期的に並存する２系統に分離し得るということを指摘した。さらに、これらを朝鮮半島出土例と比較したところ、両系統の日本列島出土三累環頭大刀がいずれも列島内で製作されたものである蓋然性が高いことが明らかとなった。三累環頭大刀は、新羅との交渉のパイプを有した倭王権中央の内部勢力がそれぞれ発注・製作したものであり、それらの勢力と新羅との直接的な外交交渉を媒介した存在、あるいは、新羅との関係を基盤とする中央勢力と地方との関わりを仲介する存在に配布されたものと評価した。

（５）重要資料の調査成果の報告・公開

上述の各研究成果を導出する過程で、これまでにあまり詳細な情報が公開されていない個別の重要資料に対する調査成果を資料紹介という形で報告・公表し、学術的に活用可能な資料へと昇華する試みを継続的に実施してきた。研究成果（１）で言及した東亜大学校石堂博物館所蔵龍鳳文環頭大刀（図１）のほか、兵庫県佐用町の本位田１号墳出土単龍環頭大刀（図３）、京都大学総合博物館所蔵の滋賀県竜王町山面老々塚出土単鳳環頭大刀など、詳細な実測図面と撮影写真を観察所見とともに報告した。なお、これらの紹介に際しては、類例との比較検討を通じ、改めて最新の研究水準から資料の学術的位置付けを試行している。

東京国立博物館が所蔵する埼玉県秩父郡皆野町稲荷塚古墳出土の鉄製象嵌装単鳳環頭大刀の研究では、東京国立博物館の河野正則氏、荒木臣紀氏と共同で、Ｘ線ＣＴの撮影や蛍光Ｘ線分析といった最新技術による調査も実施し、肉眼観察のみでは明らかにし得ない製作技法に関する所見を得た。

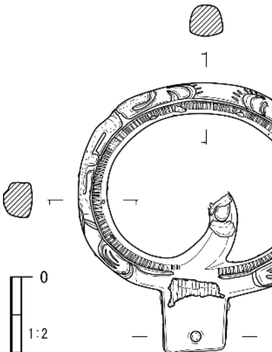

図３　兵庫県本位田古墳群
出土単龍環頭大刀柄頭

（６）まとめ

以上のように、本研究では、日韓出土資料の実見観察調査を基盤に各種外来系大刀に対する研究を進めてきた。本研究の意義は、従来「外来系」との認識はあったものの、その詳細な系譜が明らかでなかった、あるいは深く検討されないまま特定の系譜認識が共有されていた資料群を改めて検討し、より高い蓋然性をもって系譜や製作地に関する評価を定めた点にある。当該時期における日本列島勢力の対外交流を論じる上で、こうした「外来系」遺物に対する正確な系譜認識の追究は喫緊の課題であり、本研究で取り組んできた基礎的分析は極めて重要であると考える。

上述の各研究成果のほか、総合的な論文公表には至らなかったものの、単龍・単鳳環頭大刀や獅噛環頭大刀についても、実見観察調査を重ねてデータを収集している。これらの技術工人系譜に関する考察は、今後随時まとめていく予定である。

参考文献

穴沢咊光・馬目順一 1976「龍凰文環頭大刀試論―韓国出土例を中心として―」『百済研究』第７輯　忠南大学校百済研究所　pp.1-35

穴沢咊光・馬目順一 1987「古新羅墳丘墓出土の環頭大刀」『朝鮮学報』第 122 輯　朝鮮学会　pp.168-190

金宇大 2013「百済・加耶における装飾付大刀の製作技法と系譜」『文化財と技術』第５号　工芸文化研究所　pp.54-77

町田章 1976「環刀の系譜」『研究論集III』奈良国立文化財研究所学報　第 28 冊　奈良国立文化財研究所　pp.77-110

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 金宇大・河野正訓・荒木臣紀	４．巻 693
２．論文標題 埼玉県皆野町稲荷塚古墳出土品の研究－単鳳環頭大刀を中心に－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 MUSEUM	６．最初と最後の頁 7-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金宇大	４．巻 104-1
２．論文標題 日本列島出土三累環頭大刀の系統とその性格	５．発行年 2021年
３．雑誌名 考古学雑誌	６．最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金宇大	４．巻 －
２．論文標題 伝榛原町出土単鳳環頭大刀把頭をめぐる問題	５．発行年 2021年
３．雑誌名 古墳文化基礎論集	６．最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金宇大・藤木透	４．巻 －
２．論文標題 本位田古墳群等出土遺物の紹介（２）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 令和２年度埋蔵文化財調査年報（佐用町文化財報告書 第38集）	６．最初と最後の頁 37-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金宇大	4．巻 －
2．論文標題 日本列島出土母子大刀の系譜とその意味	5．発行年 2020年
3．雑誌名 羅州丁村古墳出土母子刀製作技術復元	6．最初と最後の頁 172-193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金宇大	4．巻 －
2．論文標題 大加耶系龍鳳文環頭大刀の成立－東亜大学校石堂博物館所蔵龍鳳文環頭大刀を起点に－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 柳本照男さん古稀記念論集－忘年之交の考古学－	6．最初と最後の頁 171-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金宇大	4．巻 －
2．論文標題 日本列島出土三葉環頭大刀の系譜	5．発行年 2021年
3．雑誌名 昼飯の丘に集う－中井正幸さん還暦記念論集－	6．最初と最後の頁 61-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金宇大	4．巻 本州・四国地方
2．論文標題 日本列島における百済系金工装身具の舶載と製作	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本の中の百済	6．最初と最後の頁 518-544
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　5件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 金宇大
2．発表標題 古墳に埋められた「龍の飾り大刀」―湯舟坂２号墳出土双龍環頭大刀の「価値」とは―
3．学会等名 京都府立丹後郷土資料館文化財講座（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 金宇大
2．発表標題 古墳出土刀剣の調査からわかること―埼玉県稲荷塚古墳出土鉄製単鳳環頭大刀の検討―
3．学会等名 第１回滋賀県立大学考古学研究室総会発表
4．発表年 2021年

1．発表者名 金宇大
2．発表標題 製作技法の追究は何を明らかにするのか―半島系大刀工人の「技量」―
3．学会等名 「考古学」大勉強会―構造と行為―
4．発表年 2020年

1．発表者名 金宇大
2．発表標題 兵庫県域における外来系装飾付大刀の様相とその流通背景
3．学会等名 第26回兵庫考古学談話会
4．発表年 2020年

1．発表者名
金宇大

2．発表標題
金工品からみた５世紀の東アジア

3．学会等名
特別展「海を越えたつながり―倭の五王と東アジア―」講演会（招待講演）

4．発表年
2021年

1．発表者名
金宇大

2．発表標題
韓国三国時代研究における「古墳編年」と器物編年との間隙

3．学会等名
「考古学」大勉強会―進化と脱進化―

4．発表年
2019年

1．発表者名
金宇大

2．発表標題
日本列島出土三累環頭大刀の系統とその性格

3．学会等名
考古学研究会関西例会第219回研究会

4．発表年
2019年

1．発表者名
金宇大

2．発表標題
出土地が明らかでない金工品をいかに研究するか

3．学会等名
日韓古代文化研究会第314回定例学習会（招待講演）

4．発表年
2019年

１．発表者名 金宇大
２．発表標題 古墳時代の金工職人はどこからやってきたのか？
３．学会等名 京都で冬の大学トーク モノが語る歴史ー今をときめく考古の世界（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 金宇大
２．発表標題 刀剣から読む古代朝鮮と倭
３．学会等名 第４回古代歴史文化講演会　刀剣が語る 古代国家誕生（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関